

佐藤一斎著「言志四録」を読む

- 生き方を考える -

30. 自らに厳、他に寛

自ら責(せ)むることに厳(げん)なる者は、人を責むることも亦(また)厳なり。人を恕(じょ)すること寛(かん)なる者は、自ら恕することも亦寛なり。皆(みな)一偏(いっぺん)たるを免(まぬが)れず。君子(くんし)は則(すなわ)ち躬(み)自ら厚(あつ)うして、薄く人を責む。

(訳文)自分を責めることに厳しい人は、他人を責めることも厳しい。他人を思いやることの寛容(かんよう)な人は、自分を思いやることも寛容である。これらは皆、厳(げん)なれば厳、寛(かん)なれば寛と、一方に偏していることは免(まぬが)れない。立派な人間である君子は、自ら責めることに厳で、他人を責めることに寛である。

32. 立志を尊ぶ

緊(きび)しく此(こ)の志(こころざし)を立てて以て之を求めれば、薪(たきぎ)を搬(はこ)び、水を運ぶと雖(いえど)も亦(また)是(こ)れ学(がく)の在(あ)る所。況(いわん)や書を読み理(り)を窮(きわ)むるをや。志の立たざれば、終日(しゅうじつ)読書(どくしょ)に従事(じゅうじ)するとも、亦(また)唯(た)だ是(こ)れ閑事(かんじ)のみ。故に学を為(な)すお志を立つるより尚(かみ)なるは莫(な)し。

(訳文)聖賢(たらんと)志(こころざし)を立て、これを求めれば、たとえ薪を運び、水を運んでもそれには学問の道はあって、心理を自得することができるものだ。まして書物を読み、物の道理を窮(きわ)めようと専念するからには、目的を達せないはずはない。

しかし、志が立ってなければ、一日中本を読んでいてもそれはむだ事に過ぎない。

だから学問をして聖賢になろうとするには、志を立てるより大切なことはない。

佐藤一斎著

上川正光全訳注「言志四録(一)」誌録 講談社学術文庫 1978年8月10日

- 2006年8月17日記 -